

委員会管外視察報告

総務・産業の各常任委員会
で実施された管外視察について、それぞれの委員長から報告します。

総務常任委員会

①一宮市立中央図書館

J R と名鉄の尾張一宮と一体化した尾張一宮駅前ビル（iビル）の中にある図書館。図書館は、iビルの5階～7階エリアで、5階を児童と親子対象、6・7階を一般対象とし、出入口を分けている。駅ビルという立地で、サラリーマンの通過点でもあり7階にはビジネス支援コーナーがある。ビル全体は指定管理者によって管理運営されているが、図書館は市の直営で市職員が9名と委託業者60名の体制で運営。利用者は一日平均3,000人を開館当初から維持しており、立地条件や57・3万冊という蔵書の豊富さ、インターネットブースや学習室の充実、AVコーナーや飲食可能なスペース等がその要因と考えられる。他に5

つの図書館と移動図書館があり、移動図書館は市内39カ所を月1回のペースで巡回し、高齢者や障がい者、子育て中の母親やその子ども、市内13の学校を巡回。図書のリクエストも受付でいて、人気がある。



児童フロアの様子

②奥三河田舎くらし隊

（新城市NPO法人）

農山村の古民家を農泊施設として活用する活動に取り組んでいるNPO法人。若い世代が都会に移住し、過疎が進んでいる地域の古民家を農泊施設として再生し、都会から移り住んだ人たちに民家を活用してもらう目的。農泊というと、農家に宿泊し農業体験をすることが前提だと思っていたが、経営者は農林業者である必要はなく、星空観察やほたる観賞、畦道散策など何かしら自然体験プログラム

ラムを体験する機会や場所を提供しさえすればこの制度を利用できることを確認した。農泊の収入は、宿泊料金、食事代や体験指導となる。田舎暮らしを体験したい人の為に、自分たちの生活の場を提供するものである。名古屋や豊橋の大学と協力し、留学生をインバウンドのモニターとして宿泊体験してもらい、今後の展開を検討している。豊川・豊橋地区や浜松から車で約1時間のあるところにあり、週末をのんびりと過ごしたい人たちもあり



古民家の宿泊施設

③障がい者グループホーム

（社会福祉法人むそう）

児童発達支援サービス、日中活動系サービス、グループホーム／1人暮らし支援、余暇・社会参加支援／地域生活支援サービスなど障がい者に対する支援を行っている法

人。グループホームは障がいのある方が共同で生活するための場所で、世話人やヘルパーが生活に必要な支援をしてくれる。親なきあとも生まれ育った地域で自分らしく暮らすために工夫されている。女性8人が生活する施設で、1階、2階とも206㎡の広さの2階建て民家を購入して改装。1階（4人）、2階（4人）とも個室で、食堂・トイレ・風呂は各階に在り共有。1階には重度の障がい者にも対応するためリフト付き風呂を設置。音に敏感な方への対応は二重窓。よく転倒、壁にぶつかる方には床・壁にクッション材を使用するなど障害の特性に応じて対応されており、改装費に約4千万円。働く場所の提供や所得保障もしっかり考えられ、自立に向けての生活の場となっていた。

④羽島市立桑原学園

（ICT教育）

小中一貫教育の義務教育学校。小学校から教科担任制である。1学年約20人であり児童生徒一人ひとりに目が行き

届きやすい環境である。羽島市では市内小中学校に学年単位で使用できる台数のタブレットが準備されている。桑原学園では、岐阜大学との連携により小学生用に50台のタブレットが貸与され、子供たちが何時でも使用できる環境にある。また、教育関係の出版社の協力で、漢字と計算のドリルなどが提供され、漢字と計算の基礎学習を展開している。岐阜大学が学習データを分析し教材や教諭の指導法の改善につなげる等「産官学」による学力向上協創プロジェクトを立ち上げて、ICTを活用するなどして取り組んでいる。モデル校としての役割も担っている。児童生徒も自然体でタブレット端末、大型モニターをうまく活用して授



授業の様子

（総務常任委員長 前川 文博）

産業常任委員会

①岡谷市蚕糸博物館

信州岡谷は、かつて世界の生糸生産地として栄え、蚕糸に関わる産業遺産が数多くある。飛騨糸引き工女は近代製糸産業に大きく貢献するとともに、現金収入を得るため、また家族のためにひたむきに働いていた。

飛騨市では、現在専門調査員を雇用し、工女たちの史実を調査研究してる。映画による女工哀史の負のイメージばかりでなく、明治・大正・昭和と時代の趨勢とともに工女の労働環境や生活環境（教育、余暇）が改善されてきたことも検証し後世に忠実に伝えることが大切である。

市は、この研究成果を活かして、古川の町中に歴史観光スポットを設置して活用できないかと現在検討している。このことから、博物館を視察してその可能性、方向性を確かめたいと考えた。

岡谷市蚕糸博物館は、市の施設で、絹文化の起源から、日本の製糸業の歩みなど、各種資料がとても分かりやすく展

示されていた。

また、江戸時代から昭和初期の機械が展示され、蚕糸全盛期から昭和30年まで使われていた機械が今でも動く様子を見ることができ、大変驚き、博物館に隣接する民間工場では、実際に作業している様子も見学させていただいた。

今後、岡谷市と連携、交流を深め、史実研究に関わる現地指導、資料の借用等お願いしながら、飛騨の工女の史実をしつかり研究することが大切であると感じた。

展示館の資料、展示方法等工夫することにより観光の一つの要素として可能性があると感じた次第である。



糸引き作業の様子

②長野県川上村の高原野菜

川上村は八ヶ岳山麓に位置

する年間平均気温7.5度、冬

はマイナス25度になる厳しい自然環境である。そのため戦前の生活はとても貧しく、現金収入は、養蚕と仔馬の生産のみで主に稼ぎの村であった。戦後、過酷な自然条件を逆手にとり、駐留米軍の野菜の供給元として、レタスの夏出し野菜の生産にたどりつき、今日ではレタスの出荷量が全国一位と野菜大国へと変貌した。

農家の一戸平均耕作面積2.5ヘクタール、平均年商は、2,500万円。耕作放棄地ゼロで、地域内就業率93.7%、村の人口5,000人の内、外国人実習生が1,000人である。村、農家、農協が同じ目標に向かい邁進してきたことが特徴で、飛騨市においても、儲かる仕組みづくりが大切であると感じた。

高冷地野菜、美味しい飛騨のお米、飛騨牛など飛騨の強みを活かした販売促進の取り組みを始め、担い手農家の育成、耕作放棄地の解消、外国人労働者の受け入れなど取り組んで行かなければならないと感じた。

③岐阜バイオマスパワー

（発電施設）

㈱バイオマスエナジー東海

（チップ製造施設）

この発電施設は、瑞穂市にあり、県内発となる未利用木材を主燃料とする木質バイオマス発電プラントである。

発電所の発電出力は年間6250kWHで、一般家庭約12,000世帯の年間使用電力に相当する。

バイオマスとは、生物資源の量を表し、一般に再生可能な、生物由来の有機性資源のことを指している。製材端材や、建築解体材は、紙パルプ、木質ボード、家畜敷料、木質パレット等の製造原料として既に95%が利用されている。

この木質バイオマス発電所の燃料は、間伐等で伐採されながら利用されず森林内に放置されてきた小径木や根曲がり材、枝条等の未利用木材で、この発電所では、年間9万トンの未利用木材を燃料として利用している。

近年の台風や大雨といった豪雨の際、木材や枝条等が流出し、橋梁など排水施設を閉塞し土砂や洪水の氾濫を引き起こして、人家に対する被害

を増大させたり、道路や橋梁の損傷や流失を起こす事例が発生している。

未利用木材の活用で、木質バイオマス発電を行うことは、再生エネルギーの創出をはじめ、木材の資源循環の推進、減災、防災に貢献するものであると確信した。

集荷実績は、東濃地域、郡上・下呂・高山市で、現時点で約130箇所から供給しており、市内でも未利用木材を供給することは可能である。既存の作業工程に枝条の集材や出荷工程は組み込まれていないため、木材生産事業体を中心に林業関係者と協議して、未利用木材の供給が出来るように検討していきたい。



枝条の集材の様子

（産業常任委員長 森 要）